明日へ向かって

第３学年　　学年だより
令和５年　　１２月１日
第５１号

“奏”意工夫の学習発表会④

今回は学習発表会を終えて、みなさんが感じたことを紹介するシリーズの第３弾です。

学習発表会に向けて、私は吹奏楽部で事前練習を一生懸命頑張りました。夏休みから周りが引退していく中、私は部活動に毎日参加しました。部活と受験勉強が重なり、休む暇もなく何度もくじけそうになりました。

しかし、私は吹奏楽部に入部したときから、最後までやり抜くという強い覚悟を持っていたので最後まで練習に励みました。なので今回の学習発表会での集大成の演奏には、強い思い入れがありました。本番では学校全体が一つになって楽しんでくれており、私も今までで一番楽しい演奏となりました。本当に今まで頑張ってきて良かったと心から思いました。この部活で得た経験は自分を何倍も強くしてくれました。何事にも自信を持って挑戦できるようになったと思います。また一人ではできなくてもみんなで一つになることで何倍ものカを生み出すことができるということを、部活や合唱で学びました。　　１組

僕は今まで学習発表会と言ってもなんとなくで終わらせていました。歌詞を覚えてどんな歌か覚えてなんとなく周りに合わせて歌う。このような感じでした。しかし今年の学習発表会は中学校最後の学習発表会だったので「打倒・林先生」を目指して頑張りました。音程、音の強弱、声の大きさなどいろいろなことに気をつけました。先生の話をしっかり聞いてメモしたり、友達と話し合ってどこをどうした方がいいとか考え頑張りました。僕は一番記憶に残ったのは、本番前日の練習です。この日は特にクラスの団結を感じました。男女ともに意見を出し合ったり、みんなで丸くなって作戦会議をしました。とても楽しくていつまでも続いてほしいと思いました。

本番では緊張して声が小さくなってしまいました。もう少し頑張れば良かったなと言うように後悔が少しあるけれど、自分なりに頑張れました。結果としては３組に負けて金賞にはなれませんでした。でも３年生の最後の行事として、１組みんなで協力して最後までやりきれて良かったと思います。卒業したらもうこんな機会はないかもしれないけど、今回のみんなと協力して何かをやったという経験を生かして次につなげていきたいです。　　１組

中学校生活最後の合唱コンクール。最後というだけあってみんな熱が入っていた。自由曲決めの時、去年から良いなと思っていた「結-ゆい-」を歌えることになった。去年は歌いたくても良いねと言ってくれる人がおらず、歌えなくて悔しい思いをしたので、今年歌えることになってとてもうれしかった。練習が始まるとみんなに更に緊張感が走った。最初の頃は朝練に遅れてくる人がいたり、朝でなかなか声が出ず、練習がはかどらなかったけれど、体育館練習や音楽の授業で先生にアドバイスをもらっていくうちに、ひとりひとりが本気になってきて反省点や良かった点、アドバイスなどを練習中に話し合うことが増えた。最後の方はとても良い雰囲気で練習ができた。しかし、みんな頑張りすぎたせいか喉を痛めたり風邪をひいてしまう人が続出した。

そんな中で迎えた本番。課題曲では喉が痛く、自分が思うほど歌えずとても悔しかった。しかし一番練習した自由曲では自分たちの実力をすべて発揮することができた。金賞を取れなかったことは悔しいが、自由曲で９クラス中、唯一満点が取れて嬉しかった。

３年間で一番の合唱コンにすることができたと思う。　　１組

今後の予定

４日（月）	生徒会朝会　①④カット　三者面談　面接練習　検定学習会（英語）
５日（火）	⑤⑥カット　三者面談　面接練習　検定学習会（漢字）
６日（水）	⑤カット　三者面談　面接練習　検定学習会（漢字）
７日（木）	⑤⑥カット　三者面談　面接練習　検定学習会（英語）
８日（金）	③⑥カット　三者面談　面接練習　検定学習会（漢字）
９日（土）	土曜授業公開　１組社英数　２組数英国　３組英数社

今は目の前のことをやる

２学期期末テストが終わりました。「テストだけで成績がつくわけではない」と、何度も言ってきてはいるが、返されたテストの出来を自分で判断する時、一喜一憂が極端になるのは自然な気持ちなのでしょう。そう、もう期末は終わったのです。

終わったものをああだこうだと言ってみても仕方がない。時間の無駄。事実を可もなく不可もなく受け止め、次に向かって考えていかねばならない。現実を虚像に置き換えることは無理だ。

「内申」という文字が、頭の中に浮かんでは消え、消えてはまた現れる……。「一学期評定５０％、二学期評定５０％を合わせて内申の基本データとする」と、一学期の学年集会や進路保護者会から説明してきました。だから、内申の半分はすでに確定していることは明らかなのです。「分かっていたことだろうに……」

だとしたら、内申の激変はないといって過言ではありません。変動なしであれば御の字、一つぐらい下がっていても許容範囲と見なければなりません。「分かっていたことだろうに……」

一つでも上がるように努力をするというアグレッシブな取り組みも必要なその対極で、現状維持もしくは下がった場合のことを冷静に見つめ、その中で自分の感性に合った進路先を再考する……このことが必要であったのだと、今、気付くのです。「分かっていたことだろうに……」

もう、自分にできることはないのか…焦る。不安になる。なぜ？　それは仕方がないことです。夢が現実になっただけのことなのです。しかし、いたずらに不安がってもしょうがなく、焦ってもなんにもなりません。「後悔先に立たず」などと後ろ向きな自己批判をしている時間がもったいないのです。前を向いて、現状をしっかり見据えて、今できることを着実にやりましょう。

書類を揃える。書くべきをしっかり書く。高校に出向く。保護者の方とよく話し合う。もちろん勉強もする。学校生活を落ち着いたものにし、不安や焦り、いらだちを追放する。一つ一つ、手順を踏んでやるべきをやる。この姿勢が、結局は成績だけ結果だけに振り回されることのない、本当の進路選択につながるのです。

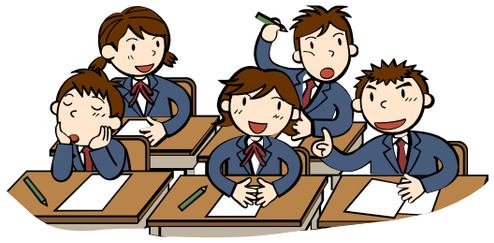
今は目の前のことをやる。

今は目の前のことを着実にこなす。

その一つ一つが、春に向けての蕾をしっかり形作るピースになっていきます。

「教え合う」ということ

テストが終わって振り返ってみると、友達同士、問題を出し合ったり、また分からないところを教えたりする光景が至る所で見られたのではないですか。友達に教えてもらうと、思いのほか良く分かったりする。それはなぜなのでしょうか。



教わる立場の者が自分の理解したことを教えるには、自分が理解する時に難しかったところや、自分がこうやって理解した、というプロセスを、等身大で相手に話すことができます。

「名プレーヤーは名コーチにはなれない」とはよく言ったもので、努力に次ぐ努力だけでは悲しいかな、その世界では一流止まり。超一流になるには、やはり努力しただけのものがすんなりと自分のものになる素養が必要なのです。だから超一流は、途上者が苦労するところがどこなのか良くわからないそうです。「なんでこんなことが分かんないんだ？」と、分からないことが分からないのです。なので何を教えたらよいのかも分かりません。結果として「教えるのが下手」となっていきます。

その人が苦労して理解したことを教わることほど有意義なことはありません。教える方にも教わる方にも大きなメリットがあります。

谷川俊太郎さんが、あるところに頼まれて、「詩の作り方」を語ることがありました。細かいところまでは覚えてないが、こんなことをおっしゃったそうです。

「その日あったことを、そのまま順番に並べなさい。最後に自分の感想を一言入れる。そうすると詩ができます。」

朝起きた 制服に着替えた 歯を磨いた 顔を洗った 水が冷たいなあと思った	⇒	朝起きた 制服に着替えて 歯を磨いて顔を洗った 水が冷たい もう冬なんだな

目からウロコです。

これをみると谷川さんは「教える」ということのなんたるかをよく分かっている方だと思われます。

話は脱線しますが、谷川さんは自分で思い描いたことをやみくもに詩にするわけではなく、依頼されたテーマに基づいて仕事として詩を書くのだと言いました。似たようなことを、作曲家も言っています。もう故人になったニューヨークフィルの音楽監督レナード・バーンスタインは、昔の芸術家がきまぐれに曲を書いたりするようなことはないと言いいました。

もとい、なんでも教え合ったらいい。先生に教わるのもそりゃあいいが、人数が圧倒的に少ない。三年生１００人以上いるのだから、数では全くかなわない。朝８：２０には顔を合わせ、１５：３０ぐらいまでは一緒にいるのです。

勉強だけではありません。面接のこと、高校のこと、願書や自己ＰＲカードの書き方、書きやすいシャー芯や良く消える安い消しゴムのこと、etc……一人で一から十まで調べるよりずっと早いし、いい知恵も生まれよう。

「三人寄れば文殊の知恵」といいます。お互いが今、なにをやっているのか、披瀝（ひれき）し合いながらやらないと無駄ばかり多くて次のステージに上がれません。「みんなで力を合わせる」というのは、そういうことです。

※披瀝…心の中を包み隠さず打ち明けること。腹蔵なく心中を披露すること。